

2011年7月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

功德について

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「十功德品」

1. 十功德品の構成

- (1) 大莊嚴菩薩が無量義の教えを讃え、その来歴について質問し、釈迦牟尼世尊が答える。
- (2) 引き続き、釈迦牟尼世尊が、第一の功德から第十の功德まで説いてくださり、最後に無量義の教えの功德をまとめる。
- (3) 大莊嚴菩薩が感謝の言葉を捧げると、天地が感動して音楽が流れ、花や宝石などが降り注ぐ。釈迦牟尼世尊が、大莊嚴菩薩たちに、無量義の教えを世間に伝えるように勧め、大莊嚴菩薩たちが、世間に広めますと答える。

2. 「功德」の本当の意味

- (1) ここには、「功德」として、次の三つが上げられています。
 - ① 精神的な功德がある。
“心が真理に満ち、安らかで活動的になる”と解してよいと思います。
 - ② 善い行ないができる。
真理にあった身の振る舞い・言葉の振る舞い・心の振る舞いができることです。
 - ③ 世のため人のために役立つことができる。
家族、友人、世間の人びとを幸せにする行ないができることです。

3. 「悟り」について

- (1) 最高の功德は、自分自身が「無上の悟り（仏の悟り）」を得ることです。
- (2) 「悟る」とは、表面の心（顕在意識）から最も奥深い心（最も深い潜在意識）までが、真理を知り尽くし、身の振る舞い・言葉の振る舞い・心の振る舞いのすべてが、真理にあったものとなることをいいます。
言い換えれば、全身全霊が真理と一体となることです。
- (3) 「無上の悟り」とは、そのような悟りのなかでも、最も高度で、もっとも深い悟りであると言っておよいと思います。

4. 大莊嚴菩薩の質問と釈迦牟尼世尊の答え

- (1) 質問：この教えは、どこから出たのか。

答え：この教えは、諸仏の心の奥から溢れ出たものである。

解説：諸仏の心の奥とは、「すべてのものの生命を、そのほんらいのすがたのとおり、ほんらいの使命のとおりに生かしたい」という願いです。この教えを学び実践すれば、自分のほんらいの生命のとおり、自分のほんらいの姿のとおり、自分のほんらいの使命のとおりに生きることができるのです。

- (2) 質問：この教えは、どういう目的へ向かってすすむのか。

答え：この教えは、一切の人びとに最高無上の悟り（仏の智慧）を求める心を起こさせる方向へ向かってすすむ。

解説：この教えを学び実践すれば、自分も、「いかなる人のいかなる場合にもあてはまる最高無上の真理」を身につけたいという願いを持たないではいられなくなります。

- (3) 質問：この教えは、どこに住みつくのですか。

答え：この教えは、人びとが菩薩行を行う実践のなかに住みつく。

解説：この教えを学び、実践すれば、現実世界の中に、真理のはたらきをまざまざと見ることが出来ます。そして、自分がほんらいの自分を生きていることを、ありありと実感することが出来ます。

5. 第一の功德

- (1) 十の功德のなかでも、もっとも重要な功德です。

- (2) ここでは、自分の内部から来る障害（煩惱）を十七項目取り上げて、無量義の教えを学び実践することで、これらの障害（煩惱）を正しく乗り越える道を、端的に示しています。

6. 第二の功德から第十の功德まで

無量義の教えを学び、実践し、人びとに伝え、自分の中から来る障害を乗り越え続ければ、次第に境地が上がっていくプロセスを、文学的表現で展開しています。

ここでは、省略いたします。

7. 煩惱について

- (1) 煩惱とは、自分の内側から自分の行い（身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞い）を乱して、自分自身を真理から遠ざけるはたらきをするものです。

- (2) 煩惱には、顕在化しているものもあれば、潜在化して折に触れて表面化するものもあります。

- (3) 煩惱は、人格形成に深く関わっています。煩惱が強ければ強いほど、人格は低くなります。

8. 第一の功德の内容

1	菩薩の未だ発心（ほっしん）せざる者をして菩提心を発（おこ）さしめ
2	慈仁なき者には慈心を起さしめ
3	殺戮（せつりく）を好む者には大悲の心を起さしめ
4	嫉妬（しつと）を生ずる者には随喜（ずいき）の心を起さしめ
5	愛著（あいじゃく）ある者には能捨（のうしゃ）の心を起さしめ
6	諸の慳貪（けんどん）の者には布施の心を起さしめ
7	憍慢（きょうまん）多き者には持戒の心を起さしめ
8	瞋恚（しんに）盛んなる者には忍辱の心を起さしめ
9	懈怠（けだい）を生ずる者には精進の心を起さしめ
10	諸の散乱の者には禅定の心を起さしめ
11	愚痴多き者には智慧の心を起さしめ
12	未だ彼を度すること能（あた）わざる者には彼を度する心を起さしめ
13	十悪を行ずる者には十善の心を起さしめ
14	有為（うい）を樂（ねが）う者には無為（むい）の心を起さしめ
15	退心（たいしん）ある者には不退の心を作さしめ
16	有漏（うろ）を為す者には無漏（むろ）の心を起さしめ
17	煩惱（ぼんのう）多き者には除滅の心を起さしむ

【参考】言葉の解説

1	菩薩の未だ 発心せざる者	形だけは菩薩のような行ないをしているけれども、仏の智慧を求める心を起こしていない人。
2	慈仁なき者	人をあわれむ心がはたらかない人。 自分本位に固まっているために人のことなど考えられない人。
	慈心	生き物に対する慈しみの心
3	殺戮（せつりく）	残忍な心を持つこと。残忍な行ないをすること。人を困らせて喜ぶ心。 いじめはこの部類に入る。
	大悲	「悲」は、苦しんでいる人を、救いたいという心。
4	嫉妬	自分よりも幸せそうな人、自分よりもすぐれていると見られている人、自分よりももてはやされている人などに対して、妬みを覚えたり、憎しみが湧いてきたりすること。 （世間で言う、男女関係における嫉妬は、愛着と瞋恚の入り交じった心）
	随喜	随い喜ぶで、人の喜びを共に喜ぶ心。
5	愛著	仏教では「愛」や「著」は「執着心」を意味する。
	能捨	捨てるべきときには、執着しないで捨てること。
6	慳貪	「慳」は自分の持っているものを極度に惜しむ心。 「貪」は人の持っているものをむやみに欲しがる心。
	布施	人のためになることをすること。人のためになるのなら、自分の持っているものを惜しげもなく提供する。財施・身施・法施・無畏施。
7	憍慢	「憍」は、自分一人で、自分は他人よりも上だと思ふこと。 「慢」は、人と比較して、自分は他人よりも上だと思ふこと。
	持戒	「戒」は、仏から示された戒め（悪を行わず、善を行う）を守る努力をくりかえし行ない、しっかり身につけること。仏から示された戒に照らし合わせると、自分が如何に未熟であるかが分かる。
8	瞋恚	ものごとや人が、自分の意のままにならないときに怒りの心を起こすこと。 「瞋」は、怒りの心を表情や行動に出した怒り。 「恚」は、怒りの心を表に出さず、心の中で怒っていること。
	忍辱	苦難に耐えること。特に人間関係の中でもたらされる苦難に耐えること。 他人の立場に立ってものごとを考えることができれば怒る心は出てこない。 さらに進めば、寛容の心が湧いてくる。
9	懈怠	成すべきことを成さない、成してはならないことを成す。 成すべきことを成していても、力を尽くさなかったり、手を抜いたりする。
	精進	真理の道を真っ直ぐ歩むこと。成すべきことを成す。成してはならないことを成さない。

10	散乱	「散」は、心がものごとくに振り回されること。 「乱」は順序立てて考えることができずに、感情だけでものごとを行うこと
	禅定	心を真理に合わせて、真理から動かないこと。 心が真理にあっていれば、誤りなく自由自在に判断し実行することができる
11	愚痴	感情のまま、本能のままに行動し、生きること。 真理の智慧をもたないこと。
	智慧	真理の智慧。
12	彼を度するこ 能わざる	自分の幸せばかりにとらわれて、他の人を幸せに導きたいという気持ちを持たない、努力もしないこと。「度」は人を救うこと。
	彼を度する	他の人を真理の道に導き、幸せを得させてあげる。
13	十悪	別表参照
	十善	十悪を行わないこと。真理に合った毎日を送ること。
14	有為	「有」は現象のこと。「有為」は現象上の幸せばかりを追いかけけていること
	無為	「無為」は、現象上の幸福を追いかけずに、真理に生きる努力をすること。 真理に生きていれば、必要なものが、必要なときに、必要なだけあるようになる。
15	退心	折角、正しい努力をしても、あと戻りする心。 厳しさに耐えかねて安易な道を求める、中途半端なところで妥協する、人には厳しいことを言いながら自分は行わないなど。
	不退	正しい努力を続けることは自分との闘いの連続である。また周囲からの妨害や誘惑などとの闘いでもある。 これらを乗り越えて、正しい道を歩み続けることが「不退」である。
16	有漏	目の前の現象にとらわれてものごとを行うこと。 よほど修行したつもりでも油断をすると、いつのまにか現象に引きずられて、真理の道から外れていく恐れがある。
	無漏	身の回りにどんな現象が起きても、真理の道から外れないこと。
17	煩惱	人はだれでも、根底では、真理の道を歩もうとしている。自分が真理を歩もうと思い、行動しようとするとき、これを妨害する心や行動が自分の中から出てくる。 このように、自分の中から生じて、自分を真理から外そう遠ざけようとするはたらきを、煩惱という。
	除滅	ものごとにとらわれる心を除き去り自分本位の心を滅し去れば、真理に合った考えを持ち、真理にあった行ないをすることができる。

【十悪】

身の三悪	殺 生	人を殺したり傷つけたりすること。 理由なく、あるいは自分の楽しみにために生き物の生命を奪うこと。 無生物にしても、その持っている使命を発揮させないままムダにしてしまうこと。（水の殺生、時間の殺生も戒められている）
	偷 盜	盗みをすること。
	邪 淫	道ならぬ男女の関係を結ぶこと。
口の四悪	妄 語	うそをつくこと。
	綺 語	口先でごまかすこと。上手なことを言って、人の心をたぶらかすこと。
	兩 舌	こちらではこちらに合わせたことをいい、あちらに行けばあちらに気に入られることをく。卑劣な態度であり、人と人の仲を裂くものである。
	惡 口	悪口をいうこと。
意の三悪	貪 欲	むやみにものごとを欲しがらる心。物事とは、お金、物、愛情など。 満足を知らない心。 （肥大化した欲望、歪んだ欲望、無用な欲望などを貪欲という。）
	瞋 恚	むやみに怒るくせ。（怒りは習慣性になりやすい）
	愚 痴	本能の命ずるままに行動し、人間らしい智慧に欠けていること。